

日本のいじめ対策を変えたい

出雲市立浜山中学校 三年 坂本沙優

現在、スマートフォンなどの情報ツールが身近な存在になり、生活が豊かで便利になった一方で、以前より簡単に人を傷つけたり、傷つけられたりする世の中になりました。そんな中で、日本でどのようないじめ対策が行われているのかみなさんは知っていますか。

日本では、いじめが発覚すると、まず事実確認を行い、事実が確認できれば被害者を中心とした心のケアが行われます。このような対策は十年以上前からとられていますが、今でもいじめは増え続けており、二〇二一年にはいじめ件数が過去最多となりました。対策がとられているにも関わらず、このような状況が続いているのは、日本のいじめ対策に問題があるためだと私は考えます。

日本では、いじめはないことを前提とし、被害者救済という視点が主流なのに対して、海外では、いじめは起きることを前提とし、いじめをした加害者を繰り返し指導するという対応が中心となっています。

例えばイギリスでは、いじめはあって当然という考え方の下で対策が行われています。イギリスの約九割の学校には防犯カメラが設置されており、いじめや問題行動が多発しているトイレや更衣室も監視対象になっている学校もあります。

他にも韓国では、いじめは暴力として認識されており、法律も制定され、加害者には厳しい罰が与えられるシステムになっています。内容は、いじめの加害行為を行った記録が成績に反映され、大学の合否に関わるなどです。更に、いじめ加害者には処分が下されます。処分には、出席停止、クラス替え、転校、退学など、全部で九段階あり、いじめの程度によって処分が決定される仕組みになっています。韓国の首相は、「加害生徒にはいじめの責任を必ず負わせ、いじめの対価を払わなければならないという意識を学校現場に根付かせるようにする。」と述べています。このように、海外は日本と大きく異なる方法をとっています。

しかし、海外のように罰則だけではいじめの根本的な解決にはなっていません。罰則だけでなく、加害者への心のケアも必要だと私は思います。

「いじめないとされないほど心が病んでしまっている。」フランスではそのように考え、加害者にカウンセリングを行い、心がその状態になっている原因を探そうです。日本では被害者に逃げ場を作って現状を回避しようとするのが主流で、更にどこかいじめられることは恥ずかしいことという雰囲気があるように感じます。実際に以前友達に相談された際にも、当時の私がしたことは「大丈夫だよ」と慰め話を聴いてあげ、傍にいる時間を増やして友達が更に傷つけられることのないよう逃げ場を作ってあげることだけで、加害者に対して何か行動を起こすことはしませんでした。ですが海外のいじめ対策から、被害者ではなく加害者に向けた対策をすることが、いじめ減少につながっているのだと知りました。ニュースで見る自殺者の中にも、いじめられている自分が情けなかった、心配をかけたくなかった等の理由から周りに相談できないまま亡くなった人が多くいます。もし、日本もいじめ

に対して海外のような認識があれば、命を落とさずに済んだかもしれません。日本でも、「あの子はいじめをしないとイケないくらい大変な状態だから、カウンセリングしてあげて。心をケアしてあげて。」と簡単に言えるようになればいいと思います。そのためには、「被害者だけでなく加害者にも心のケアが必要だ」という考えを多くの人が理解し、意識しながら生活することが必要です。この考え方を多くの人に知ってもらうために、まずは私の身近な人に伝えていき、いじめに対する見方を変えるきっかけづくりをしていきたいと思います。また、一人一人が日頃から周りの友達に声をかけたり、何かあれば真剣に話を聴いたり周囲の状況に目を配りながら生活することも大切なことです。相手の様子の変化にいち早く気づき、対応できるようにすれば、加害者になってしまう前に防ぐことができるのではないのでしょうか。相手が出してくれているサインを見落としとして手遅れになってしまうことがないように、私は今まで以上に、様子に気付けるように周りに目を向けようと思います。時間はかかると思いますが、私の周りから少しずついじめに対する考え方を変えていきたいです。この作文を通して

「いじめで本当にケアが必要なのは加害者であり、対策が必要なのもまた、加害者だ」という考え方をより多くの人に伝えたい。そして日本の社会のいじめに対する見方を一八〇度変えたいです。いじめで悩み苦しむ人を一人でも多く減らせるように。